Ann. Rep. Asahikawa
Med. Coll.
1984, Vol. 5, 21~36

並書文字とその音質をめぐって

平野 日出征

0.

朝鮮語がその文字を持ったのは、李朝1443年に第四代王である世宗によって創製されたいわゆる「訓民正音」の公布によってである。音声文字として創製されたこの文字によって表記された李朝以後の文献によって、朝鮮語が、今日までに蒙ってきた変化のなかで、特に、音韻における変化は比較的容易に知ることが出来るように思われる。それは、「訓民正音」所製の文字と今日、使用されている文字を比較してみれば一目瞭然であろう。もちろん、文字の変化がそのまま音韻の変化と同一であると言うことは出来ない。さらに、音声文字であるにもかかわらず、「訓民正音」所製の文字中には、いかなる音を表記したものであるのか明らかでない文字がある。このような文字のうち、音韻変化のうちの重要なものの一つである硬音化現象と深くかかわってくるのが、初声並書文字である。初声並書文字は、語頭にあらわれる子音を表記するための文字である。

この文字はいかなる音を表記するために創製されたのかを文字体系、文字創製の底にある理念、表記の変動、硬音化現象そして外国語表記を考慮しつつ考察するのが本稿の目的である。このような考察によって「訓民正音」は、いかなる文字組織であるのか、その文字のもつ理念は何かを明らかに出来ると思う。

本稿では、まず「訓民正音」所製の文字について述べ、次に、「訓民正音」当時の硬音の存在の有無と硬音化現象について考え、並書文字がなぜ必要とされたのかを論じてみたい。

この問題については、多くの学者がすでに個々の見解を明らかにしている。音価がその議論の中心になっているものが多いように思われる。文字は、創製当時においてさえも、使用する人の考え方が入りこむ余地がある。音声文字であり、しかも、文字の数が多きことから創製者の意図とは異なる用い方もありうるだろう。したがって、並書文字に関する問題は、ただ単に音価の問題だけにとどまるものではないのである。

1.0 「訓民正音」所製の初声文字

「訓民正音」創製の当時の総字数は28字あるが、そのうち、初声字は、17字である。その17字は、牙音の ㄱ, ㅋ, ㆁ, 舌音の ㄷ, ㅌ, ㄴ, 唇音の ㅍ, ㅂ, 齒音の ㅅ, ㅆ, 喉音の ㅇ, ㆏, ㆑, これら15字に加えて、半舌の ㄹと半齒の ㅈである。これらは、

単字で使用されるが、これらのうちに並書文字として用いられる文字がある。同じ文字を並べて書くものを「各自並書」といい、一方、二つ以上の異なる文字を並書するものを「合用並書」と呼んでいる。これらの並書文字も、また、初声を表記するために用いられた。各自並書には「刀, ㄷ, ㅌ, ㅍ, ㅑ, ㅓ」の6文字あるが、訓民正音解例には述べられていないが実際に文献に見られる文字として「00, ㄴㄴ」の2文字がある。また、合用並書には、「ㅌㅌ, ㅌㅍ, ㅌㅑ, ㅌㅓ; ㅌㅑ, ㅌㅓ, ㅌㅑ, ㅌㅓ; ㅌㅑ, ㅌㅓ」の10文字がある。この他に「連書」と呼ばれる文字があり、唇軽音を表わす「ㅍ, ㅑ, ㅓ, ㅑ, ㅓ」と舌軽音を表わす「ㄴ」があるが、実際に使用例がみられるのは、このうち、「ㅍ」のみである。

これらの文字のうち現在でも使用されている文字と、使用されていない文字をまとめてみると：

a. 使用されている文字

イ. 単字

ㅍ, ㅑ, ㅓ, ㅑ, ㅓ, ㅑ, ㅓ, ㅑ, ㅓ, ㅑ, ㅓ

ロ. 並書

1. 各自並書 刀 ㄷ ㅌ ㅍ ㅑ ㅓ
2. 合用並書 なし

b. 使用されていない文字

イ. 単字 ㅑ, ㅓ, ㅑ, ㅓ,

ロ. 並書

1. 各自並書 ㅑ, ㅓ, ㅑ, ㅓ
2. 合用並書 すべて

以上のごとき文字が創製され、朝鮮語を表記するために用いられた。「訓民正音」は、その中に解例があり、文字の使用例とともに発音法を記してあるが、そのみでは、正確な音価が分らない場合もある。また、現在に至ってもなお使用されているとはいえ、音価が当時とは異っているものもあると思われる。並書文字について考える場合、朝鮮語にみられる硬音をどうしても考えねばならない。

2.0 硬音と硬音化

朝鮮語の硬音とは、声門閉鎖を伴う子音で [ʔk, ʔt, ʔp, ʔc, ʔs] のように音声記号で表記される音のことである。現代朝鮮語では 刀, ㄷ, ㅌ, ㅍ, ㅑ, ㅓ の文字で表記される音である。朝鮮語に音韻史上、硬音化があったことは、平音から硬音になった例があることから明らかである。これに属する例は；

(1)

꽃 > 꽃(꽃), 불휘 > 뿌리(뿌리)

このような平音>硬音の他に、15世紀、16世紀にあらわれる語頭の並書文字で表記されているものが硬音になったとされるものである。この考え方は、当然、並書で（この場合、合用並書が問題となるが）表記されている音は少なくとも重子音であることを前提としていると考えてよい。そこで、合用並書は、すべて重子音、あるいは、三重子音を表記したものであり、各自並書は、何か別の音を表記するために並書したもののなのであるのかという問題がもち上ってくる。もし、合用並書は、複合子音を、各自並書は硬音を表わしていたとすれば、問題は、この硬音化は、平音>重子音>硬音となったのであるのかどうかということになるであろう。これは、(1)の例で、硬音としてㄱと表記されるものとㄱと表記されるものがあつたことから生じてくる問題である。もし、朝鮮語に硬音が文字創製当時は存在しなかったとすれば、硬音化が実現されたとき、その表記法をいかなる根拠をもとに決定したのであるかという問題も残ることになる。この場合、もう一つの問題、複合子音の硬音化があつたとすれば、いかなる音を硬音になる以前は表記していたのが興味ある問題となるだろう。したがって、平音>硬音の変化を受けた語の表記がいかなるものかを知ることは重要な意味をもつものである。

さて、15世紀、文字創製当時に硬音が存在したのか、もし存在したとすれば、それは、いかなる表記をもって表わされたのであろうか。まず、次の例をみてみよう；

(2)

- a. 製·쟁·논·글지·슬·씨·니 (訓民)
- b. 後世에 釋迦佛 ㅌ외심^ㅇ을
- c. 世尊이 須達이 올^ㅇ물 아^ㅇ르시고
- d. 이시^ㅇ럼 부^ㅇ되 잘^ㅇ와 아^ㅇ니
- e. 내^ㅇ게 풀^ㅇ다 문^ㅇ홀^ㅇ다
- f. 내^ㅇ실^ㅇ을 濟渡 |라^ㅇᄒ^ㅇ니^ㅇ라
- g. 種種히 發明^ㅇ을 일^ㅇ후미 妄^ㅇ想^ㅇ이^ㅇ니

以上の例より、ㄱの次にあらわれる音の表記が二種類になっていることが分る。ㅇ+平音表記のものとㄱ と表記されているものがそれである。これより、語中においては平音表記と異った表記を要求する音の接続による変化があつたことが知られる。しかし、これが平音>硬音という変化であつたかどうかは明らかではない。ただ、次の例をみると、中期朝鮮語においても、少なくとも、有声子音+平音と無声子音+(無声子音)平音二つの子音接続の際に、平音の側に変化が生じることは知っていたものと考えてよいであろう。

(3)

- a. 유무 드^ㅇ를 사^ㅇ람, 나^ㅇ르고져 흥^ㅇ배
- b. 先考 ㅇ^ㅇ뵈, 邪^ㅇ상 ㅇ^ㅇ字·^ㅇ중

ただし、即・奇 字々

ㄱは、未来をあらわす用言の語尾の「-ㄱ」に必ず付けて「-ㄱ」を表記したものである。b. の使用例は、「間音」として表記されたものである。ㄱは、訓民正音で、「ㄱ喉音如拈字初發聲」と規定されている。しかし、この文字が初頭音を表記するために使用された例は、漢字の表記においてのみである。また、喉音を表記するための文字体系は、ㄱ, ㄴ, ㄷ, ㄹであるが、ㄱはフ, ㄴ, ㄷ, ㄹと同じく、全清に属し、ㄴは、次清で、ㄷ, ㄹなどと同じ類に属しているが、並書で全濁を表記するための文字はㄱではなく、ㄴである。他の音の場合には、全清を並書して、全濁を表記する文字ㄷ, ㄹなどを創るにもかかわらず、喉音のみㄱとする。さらに、合字解において、「初聲之ㄱ與ㄴ相似於諺可以通用也」と説明されている。訓民正音を創製した学者たちは、まず文字体系を中国音韻学に基づく音体系の一つの手本とし、音の調音様式を第二のよりどころとして採用していたと考えてよいであろう。

例b.の間音は、ㄱの他にフ, ㄷ, ㄹ, ㄴ, △の五文字が使用されている。ここでも、使用されている文字中にある△は、不清不濁である点で他の文字と異なる範ちゅうに属する文字である。したがって、△もㄱも実際には、朝鮮語に対応する音をもたない体系の側より考えられ、創られた文字ではないかという疑問が生じてくる¹¹⁾が、この問題は、別のところで論ずべきであると考ええる。

さて、例(1)における例中にみられる「-ㄱ」のあとの文字、「ㄱ」のあとのㄴは、どのような音を表記してしているのであろうか。ㄱは、単なる標識にすぎないもので、次に来る音があるいは文字が、独立した形式素の初頭音であることを示していると考えることが出来るのか、あるいは、現在のように硬音に近い音で(音韻論上は硬音)発音されていたと考えることが出来るのだろうか。ㄷ, ㄴをみると、この一方のㄷ, ㄴは、間音であり、ㄷ, ㄴが単一の音を表記していたとは考えないのが正しいのだろうか。後者であれば、正音創製当時には、この環境において、硬音をもっていなかったと考えてよいことになるだろう。つまり、間音は、単に形式素の境界を示す標識にすぎないと考えられるが、次の例をみると当時は文字の使用について、その実際の音に大きな影響を受けけていたこと、それを正しく表記しようとした姿勢がうかがわれる。

(4)

·ㄱ·ㄴ~·ㄴ·ㄴ~·ㄴ·ㄴしかし、*·ㄱ·ㄴこのことより、ㄱの次に現われる子音は硬音と認識されてはいなかったようである。しかし、ㄴ, ㄷに関してはどうであろうか。これらについては、並書の議論の際に再び取り上げることにはしたい。

さて、16世紀の文献にあらわれる平音>硬音といういわゆる硬音化した語の表記について考えてみよう。次の例をみてもみることにする；

(5)

그스 > 크스 (牽) 수다 > 쑤다
 십다 > 셉다 (○) 글히다 > 설히다
 빙다 > 썩다 (撒)

この例で、特に注目すべき点は、すべて硬音化した音は、人系合用並書で表記されていることである。このことにより、訓民正音成立当時、合用並書がいかなる音を表記していたかは不明であるにせよ、16世紀、これらの例があらわれると同時に人系合用並書と日系合用並書の混記がみられ、17世紀には相当数にのぼるところから、この時期には人系合用並書は硬音を表記し、正音成立当時人系合用並書をもって表記されていた音は、硬音であるにせよ、複合音であるにせよ、16世紀では、硬音を表記していたことは確実である。また、この硬音化と日系合用並書における日脱落現象が並行して生じており、二つの音韻現象の間に関係があるのか、また、日系合用並書の日は、いかなる役割をもっていたのか、さらに、合用並書は各自並書にとって代られて現在まで残れなかった理由は何か、などの疑問が生じる。これらを合用並書の使用例を通じて、さらに諸学者の説を引用し、検討しながら考えてゆくことにする。

2.0 各自並書とその音価

各自並書の音価推定に関しては、有声音説、硬音説、複合音説が理論上からも可能である。前節にも述べたように、各自並書の文字は、本来、訓民正音で、全濁を表記するものとして、設定された文字である。これらの文字の音価として、硬音であるという説と有声音であるという説が存在する。李崇寧教授(1961)は、有声音説をとっており、次のように論じている。「訓民正音の初声体系に含まれる文字には、それが現実に合致した体系というのではなく、東国正韻の字母をそのまま伝えたものであって、したがって、現実の音韻単位を表わしているものとは認められないものも含まれている。まず、ㄸ, ㅌ, ㄺ, ㄻ, はそれぞれ [b], [d], [g], [j] などを表記しており、有声音の表記である。なお, ㅍは固定した用例がなく, ㅍと同一であると考えられる」。この理由として、次の2点を主張している。

(6)

- a. “ㄸ, ㅌ, ㄺ”는 본서 새 漢字音의 “g, d, b” ……를 表記코자 만든 것이며, 國語에 當당히 使用된 例도 없이 音韻이 될 수 없다.
- b. 간혹 語中에서 前後音 關係로 特異한 境遇에 “ㄸ, ㅌ, ㄺ, ㄻ, ㅍ”의 表記를 볼 수 있으나 그렇다고 해서 도저히 音韻單位가 될 수는 없는 것이다.

(李崇寧 (1961))

これについて、許雄教授(1970)は、別の観点から、例を引用しつつ、有声音とは考えられないことを論じ、各自並書は硬音と考えるべきであると述べている。教授の根拠

を簡単に要約して記すと次のようになる。

(7)

- a. ㄹは有声音と考えることが出来るか。
- b. ㅃㅅㅈ이 > 마쯔빙, ㅅㅅㅈ > 조쯔と表記されるが、それは有声音とみなしうるのだろうか。
- c. 冠形詞形ㄷの次にㄹを記すものを各自並書を用いて表記するものがある。例えば, 이십저커~ㄹ저커。この저を有声音と考えられるであろうか。
- d. もし、各自並書が有声音とするならば、도쯔기, 지ㅃ, 남ㅃ, 그디, などのㅃ, ㅅ, ㅈ, ㅊがなぜ並書で表記されないのだろうか。
- e. 申叔舟が「我国語音 其清濁之辨與中国無異 而於字音濁無濁声」(東国正韻序)と記しており、有声音、無声音の対立がないのになぜその文字を創ったのか。

などが主な論拠である。b. c. d.をもって、当時の発音習慣が今日のものと同じであり、硬音と考えざるを得ないとする根拠としているように思われる。しかし、a. ~e. いずれも有声音説を否定するための根拠とはならないように思われる。李教授が、初頭音を問題にしているのに対し、許教授は、語中子音連続を問題にしている点がその一つである。さらに、前節で考えた語中音表記の議論から、また、合用並書を創製したことから、当時の学者たちは、語中音と初頭音について、音の同一性を考慮に入れていたかどうかについて疑義があると思われるのが第2点である。

以上の両説とことなる第三の説を、劉昌惇教授(1964)が提昌している。劉教授は、これらの並書は、有声音を表記する文字ではなく、歯音閉鎖を伴った複合音であると主張している。彼は、これを複合硬音と呼び、[t'k]などで発音表記される音であると考えている。劉教授が、各自並書が有声音を表記した文字でないとする根拠として次の6点をあげている。

(8)

- a. 訓民正音解例の制字解で「全清凝則為全濁」という記述があり、全清が凝って(ㅇ기다)有声音となるのであろうか。
- b. 正音の制字解で、「ㄷ, ㅌ, ㅈ 其声最不屬」といっており、終声解では、「全清, 次清, 全濁其声為屬」という。したがって、なぜ「ㅃ, ㅅ, ㅈ」のうち、ㅃのみが有声音でありうるのか?
- c. 東国正韻序で、申叔舟は、「我国語音其清濁之辨與中国無異 而於字音獨無濁声」とあり、我音濁声はあっても、漢音濁声はないとし、我国濁声は、硬音をさすものであり、存在しない漢音濁声は、硬音の漢字音のことを指していると考えざるを得ない。
- d. 正音解例制字解に「ㄹ凝則為全濁」とあり、有気音であるㄹが凝声となっている

筋がなぜ有声音といえるのか。

- e. 柳僊は諺文志で濁声が生じるのは、「全清承本音之終者 如ㄱ가為가까…除雙喫二字之外 都無濁声」といい、当時の学者が、全濁を硬音としてみていた証拠である。
- f. 正音解例制字解に

「蓋喉屬水而牙屬木，ㅇ雖在牙而与ㅇ相似，猶木之萌芽生於水而柔軟，尚多水氣也。ㄱ木之成質，ㅋ木之盛長，ㄴ木之老莊。」このことより、ㄱが有声音を表記するものではないことは明らかである。

これら6つの論点をもって、有声音説に疑問を提出している。劉教授が、各自並書は、齒音閉鎖音を伴う硬音であるとする理由として、ㄱ冠形詞形の例を中心に根拠を提示している。ㄱ+ㄱ, ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㅇは, ㄱ+ㄴ, ㄴ, ㄷ, ㄹと交代可能である。また、-ㄱ 가においても、-ㄴ 가, -ㄷ 가, -ㄹ 가がそれぞれ相互に交代して使用されており、したがって、各自並書が硬音を表記していることは明らかであるとしている。しかも、「ㄱ」が「ㅋ」と同一に扱われているところから、「ㄴ」も同じであると考えてよいと結論している。

許氏は、劉氏と同じ根拠を提示しているが、「音節最後の無声子音と次の音節初頭の無声子音が続くとき、後者が硬音となるのは、自然なもので、いつの時代も同じであろう」と述べて、さらに、「現代では、これら各自並書で書かれたものは、すべて硬音である」と主張し、各自並書は、創製当時においても、やはり、硬音を表わしていると論じている。

以上のように三つの異った所説が主張されているが、依然として、各自並書がいかなる音価を持つものかは、明らかになったとは考えられない。各自並書の使用例と問題点より、次のような疑問が考えられる。

(9)

- (1) 各自並書は、初声字としては朝鮮語固有の語に用いられることはなく、漢字音の表記にのみ使用されている。もしㄴ, ㄷ, ㄱ, ㅇ が硬音を示し、同一の音価をもっているとすれば、なぜ初声字には変動がみられないのか。漢音も同じ文字で表記出来るはずではないのか。単音硬音とすると、ㄴは、硬音であるとは考えないのか。もし、初声のㄴが別の音を表わしているとしたら、語中と初声は同じ文字で異った音を表わすということであるのか。
- (2) 訓民正音の諺解本に、中国語音の齒頭、正齒の音を区別する文字を作りあげているが、なぜなのか。この文字は、各自並書に修正を施した文字である。
- (3) 語中において、各自並書が用いられる例があるが、初声字としては使用されないとしたら、二つの可能性がある。一つは、各自並書は、中国語音を表わすためのものであるというもので、もう一つは、初頭音とは何らかの音質における相異

があったというものである。

以上の疑問を考えてみるために、まず、訓民正音は、なぜ作られねばならなかったのだろうかという点を考えねばならない。もちろん漢字で表記することの出来ない音があるからで、これは、訓民正音に「國之語音異乎中国，与文字不相流通」と言っている所から明らかである。しかし、文字の創製は、中国音韻学完全に依存しており、さらに、中国語の音韻を完全に記述出来るように意図されているようである。また、表音文字でありながら、文字の組合わせ方に、扁やつくりの特徴がのこっている点にも、中国の影響が強く残っている。漢字を使用し、諺文を國字とすることに反対する者を押えるためにも、中国語音を記述出来しかも、國語音韻も表記出来ることが必要であったと思われる。そこで、語中に生じる硬音を表記するための間音十平音を國語音韻を記述するのに使用し、論理的説明の容易な、しかも、音韻学的にも「全清凝則全濁」と説明され、体系的な均一性を保つことが出来る各自並書で中国音を表記した。したがって、各自並書は、初声音として、國語の語音には使用出来ない文字であったと考えられる。

この各自並書を考えるとき、 $\overline{\text{oo}}$ 、 oo 、 ll の各並書と申叔舟の述べていることが重要な意味をもっているように思われる。このうち、 ll は、 $\text{달나라} \rightarrow \text{단나라} \rightarrow \text{단ll}$ 나라のごとく $\overline{\text{o}}$ の l への同化を表わすためのものであったところから $[\text{nn}]$ を示す文字で、さらに語頭に使用されることがない文字である。この点から、音変化に伴う発音様式の変化を示そうとするために生れた文字であると考えてよいと思う。また、 oo も $[\text{y}]$ に伴われることが多く、次の例から、 $[\text{i} + \text{o}]$ 、 $[\text{i} + \text{i}]$ などから生れる音の変化を示そうとしたものであろうと考えられる。

(10)

- a. 使^ㄹ喚^ㅅ 喚^ㅅ여 喚^ㅅ는 마리라
- b. 네물 메운 宝車
- c. 사름^ㅅ밧게 ㅿ^ㅅ연 고돌 긋 아라

最も重要なのは、 $\overline{\text{oo}}$ である。 $\overline{\text{oo}}$ は、(8)の4.によれば、全濁である。しかし、濁声は、当然有気音に生ずるはずはない。このことが、 $\overline{\text{oo}}$ が、漢字音に使用されない理由である。(8)の3.の東国正韻の序は、字音に全濁が存在すると言っており、これは、まさに、各自並書が示す音であることは、訓民正音の解より知られる所である。字音とは、朝鮮漢字音である。中国漢字音の朝鮮における音には、濁声は存在しないと述べている。すなわち、濁声を有する漢字音を表わすのには、朝鮮語音の全濁を表わす文字をもってせねばならないというのがその真意である。それでは、朝鮮語の語音として存在する濁声のない全濁音とは、一体いかなる音であるのか。これこそ、硬音に他ならないのである。従って、初頭硬音を表わすために、濁声全濁を表わす各自並書は使用出来なかったのである。このように、考えられるならば、諺文志にみられる「除雙(쌍)喫(씩)二字之外

都無濁声」も容易に理解出来るのである。

(9)の疑問の(1)については、合用並書の議論の際に述べるが、語中も語頭と同じ音を表わしていると考えられる。(2)については、すでに明らかである。中国音を表記翻訳するためには、各自並書を変形して用いるのが当然である。(3)については、間音+無音子音の連結が、硬音であるか歯音閉鎖を伴う音であるかはともかく、初頭音と同一の文字によって表記されていれば、同一の音をもつものであると考えねばならない。しかし、語中における表記にみえるㄷ~ㄷのごとき交替は、間音+平音という分析的意識をもって書かれる場合と、音声的特徴を主として書かれる場合にもとづくゆれであると考えられよう。そして、各自並書が、初声字としては、用いられないのは表記上の約束のためである。

ㄷと並んで、朝鮮語固有の語に用いられる各自並書としてㄹがある。

(11)

a. 쓰다, ㅅ다, ㅅㅎ다, ㅅ다, ㅅ따

b. 소다, ㅅ다, 사ㅎ다, 스다, 상다

a.の例は、龍飛御天歌、釈譜詳節、月印釈譜などにみられ、b.の例は、円覚経諺解、杜詩諺解にみられる。a. とb. の例は、同じ意味の語の表記におけるㄹとㅅの交替の例である。この表記の相異は、重要である。すなわち、合用並書の音価の議論に重大な影響をもつからである。a. の例の ㄹは、濁声をもつ全濁音と考えることは出来ない。b. の表記になるのは、a. の例ののち20~30年後である。ㅅは、閉鎖音でないために、完全な [+tense] をもつ子音と認められない傾向がある。このことは、ㄷについても言えることである。[+tense] 性の程度が低いことが、ㄹ→ㅅ、ㄷ→ㅌ(ㄷなど)に取って代られる大きな要因の一つであることに疑いないと考える。

劉氏の疑問点の一つである「厲声」に関しては、厲声は、[obstruent] を指し、不厲声は [resonant] を指し、これらは、音響的な面からの記述であると考えられる。また、この当時までには、すでに、中国語音には、北方音において、全濁音は存在していなかったと言うことが、「中原音韻」によって知ることが出来ると言われている。¹²⁾

以上の議論から、各自並書は、濁声を有する全濁音を表記する文字として作られたことは、疑問の余地がない。中村完教授(1968)が述べているように、濁声全濁音の表記は、中国音韻学の枠組の中における文字の位置づけであり、朝鮮語音韻とは同一であると考えられない。このことより、全濁音を表記する場合、朝鮮音韻においては、濁声なしの全濁音を表記するために他の文字を作らねばならなかったのであろうし、逆に言えば、朝鮮語音韻からみた各自並書は、硬音にまちがいないのである。朝鮮語音を表記する文字については、常に現実音を分析的に考究することにより、創製したと考えられる。この好例である合用並書の音価が明らかになれば、並書の朝鮮語音韻学における位置がはっきりするであろう。従来、有声音か硬音かと議論されて来た各自並書の本質は、

中国音韻の範ちゅうにおいて、有声音を表記する、つまり、中国音韻の全濁音表記のための文字であり、その一方で朝鮮語音韻の範ちゅうでは、全濁、すなわち、硬音を意図しているものである。これが、全濁は硬音である、濁声は硬音の音のことである、凝は有声音を表わすものではない等と主張されることを許しているものとする。このように両面の音韻をもつ各自並書が朝鮮語固有の語に使用されなかったのは、一つは、それが、濁声をもたなかったため、一つは、他にそれを表記すべき文字を創製出来たため、さらに、当時の朝鮮において、漢語を翻訳することが重要であったためであると考えられる。

3.0 合用並書とその音価

正音創製当時使用されていた合用並書は、二つの系列があり、それが入系文字と日系文字であることは、すでに、述べた。合用並書と各自並書の相異点は、前者は、漢字音翻訳のためには使用されないこと、また、訓民正音において、この文字が表記する音について言及していると思われる字句が存在しないことである。

合用並書を考えるとき、前に述べたように、この文字のうちのいずれかが、硬音を表記するために創られたのではないかと考えられる。従来、三つの説が行なわれている。一つは、これらが、複合子音を表記しており、合用されている文字要素それぞれが平音と同じ音を表わしていると考え。他方は、入系は硬音と考え、日系は、二種あり、複合音と複合硬音と考えるものである。第三は、すべて内破音を伴う複合音とするものである。この三説によると、合用並書は次のような音韻を表記していたこととなる。

(12)

(a) 入系 [sp, st, sts, sk, (ss)]

日系 [pst, psk, pth, pt, pc, ps]

(b) 入系 [^ʔk, ^ʔt, ^ʔp, ^ʔc, ^ʔs]

日系 [p^ʔt, p^ʔk, pth, pt, pc, ps]

(c) 入系 [t^ʔk, t^ʔt, t^ʔp, t^ʔc, t^ʔs]

日系 [p^ʔt, p^ʔk, p^ʔth, p^ʔt, p^ʔc, p^ʔs]

a. b. c は可能性としては、同じである。まず劉昌惇教授 (1964) は、歯音閉鎖を伴う、あるいは、日系については、閉鎖音 (内破音) を伴う複合音であると述べている。したがって、硬音と意識されたのは、[p^ʔt, p^ʔk] を表わす ㅃㅈ, ㅃㅉ においてのみであり、現代の硬音の如き単音として、実現されていなかったと考えている。その他の二つの説については、a. 説を許雄教授が、b. 説を李基文教授が唱えている。まず、入系合用並書から考えてみたいと思う。

3.1.1 入系合用並書

まず、入系並書が歯音内破音を伴う複合音とする根拠として述べられているものを引用してみる。

(13)

(a) 入系並書は、齒音内破音である入と清音に分離出来る。

例 머리 갖가 (割) ↔ 머리 가사

炭 온 숫기라 ↔ 수서 드외오

깃브다 ↔ 기쁘게

다왔더니라 ↔ 다왜써니라

머리 좃습고 ↔ 머리 조습고

(b) 先行音が有声音で終る複合辞の間の入が音節をこえて上下する。

例 감돌다 : 감入돌다 : 값돌다 : 감뜰다

손 가락 : 손入가락 : 슌가락 : 손샤락

ここで、分離されるものと並書されるものが交替することが、齒音内破が先行する根拠となりうるものであろうか。たとえば、값다について、값다という語形があらわれることがある。しかし、안조되, 안주라, 값기든は、現われるが、안조되の代りに안소되と書かれることはないのはなぜであろうか。また、もし終声や間音がその音を現実に持っているとするれば、빚슴~*비슴のごとく、多くの語において表われるはずがないと思われる。このことより、劉教授の根拠は、単音の硬音であるとする主張の論拠ともなりうるのではなかろうか。最も考えやすいのは、初頭音を表記する入系並書と同じ文字を語中に用いる時、それは、明らかに同一の音を表わし、しかも、語中においては、すべてが、交替の表記をもっていない点からみて、現実の音に対する認識の差があったのではないか、そうであれば、語中における同化現象の存在を示していると言えよう。李基文教授の論を引用してみると：

(14)

(a) 그릇분 장망ㅎ라

香 온 흘갓 옷갓 흘 것분 아니라 세썌 널어노

ここで분が분と書かれているのは、그릇분とその発音における差がないからである。

(b) 쫘주뵤니, 좃주뵤, 좃주뵤, 조쫘겨늘

このような交替が生ずるのは、すべて、同一の音の異なる表記であるため、硬音を表記していると考えざるを得ない。

(c) 눈쫘수로, 눈쫘이, 눈쫘이

この例においては、ㄷは内破音としての役割をもっていない。 $ㄷX=ㄷ$ の等式が成立する。

このように、劉教授が、齒音内破が先行する硬音とする根拠とした交替の例と同様の例を李教授は、単音の硬音であるとする根拠としている。許雄教授 (1970) は、ㄷは、齒

系のあきまとなっている田が現われないのは、日系並書が人系とは若干異なる音の表記に使用されたことと、田と同じ音を表記することになるためではないかと考えられる。

結論として、人系並書は、複合音を表記したものではなく、李教授の主張するように、単音の硬音を表わすものであったと考える。人系を合字の前に用いたのは、硬音を語中子音接続の音変動からみて、音声を分析的に考え、複合による音と考えたものに相異なる。人系並書で表わされた音の硬音化は、あったとすれば、正音創製以前としなければならない。

3. 1. 2. 日系並書

1.0においてすでに記したように、日系合用並書には、ㄱ, ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㅁ, ㅂ, ㅅ, ㅆの七文字がある。日系並書において、最も問題となる点は、日(ㄷ)の表記している音が何であるかということである。これについて、劉教授は、

(16)

- a. / ㅁ, ㅆ / の二つは、この当時においても、内破音と硬音の複合音である。
- b. / ㅁ / は、本来、硬音とは関連がない。
- c. / ㄱ, ㄴ, ㄷ, ㄹ / は、この当時、硬音ではない。

以上の主張の根拠として、次のような例を引用している。

(17)

- a. 音韻境界をこえて、日(ㄷ)が移動する。

{	거슴지 ㅎ이다
{	거슴뜰 양 ㅎ노
{	디만 ㅎ 일 업수니
{	날 마티 들리도 어쓰새리
{	듬애 임
{	들싸게

- b. 複合辞において次のような音韻変化が生ずる。

손뽀 > 슌씨, 샷뽀 > 샷싸, 저뽀 > 저씨

{	ㅎ뽀 소리 내야
{	ㅎ씨 구씨에 마당기 주고
{	ㅎ뽀 주그니라

b.の例から日音(ㄷ)が, L [n] に影響を与え, 部分同化していることが知られる。したがって, 日音(ㄷ)は, 破裂音あるいは内破音いずれにしても, 明らかに存在していると考えねばならないだろう。ただ, ㅎ씨のごとく, 日音(ㄷ)を失ってしまっている例から, 両唇性という特徴のみの音で, 両唇閉鎖音と考えるのが, ㄱ, ㄴの日音については, 最も説得力のあるものと思う³⁾。現実には, この日(ㄷ)が, 脱落する変化を最もよく受けたのは, 音として表面化しない音であることを考えれば十分納得出来るだろう。

日系合用並書を考える時、この文字で表記されるについて、混記がみられることを考慮に入れることが必要である。徐廷範教授（1975）、劉教授（1964）によれば、次のような交替が15世紀にはすでにみられると言う。

(18)

- a. ㅈ : ㅉ
 뛰 : 흰 뛰로 니유니
 뒤 : 뒤 為茅
- b. ㅈ : ㅉ
 찢다 : 내 찢친 나그네
 좇다 : 衆賊이 좇거늘
- c. ㅈ : ㅉ : ㅈ
 찢돌 : 찢돌, ㅈ이다 : ㅈ다, ㅈ다
 ㅈ돌 : ㅈ돌 단
- d. ㅈ : ㅉ
 ㅈ어디다 : 空애 ㅈ어다여, ㅈ다 : 마등기^{ㅈ어}
 ㅈ어디다 : ㅈ어던 ㅈ물, ㅈ다 : ㅈ ㅈ회
- e. ㅈ : ㅉ
 ㅈ다 ~ ㅈ다, ㅈ다 ~ ㅈ다
- f. ㅈ : ㅉ
 ㅈ리다 ~ ㅈ어
- g. ㅈ : ㅉ
 ㅈ다 ~ ㅈ다, ㅈ다 ~ ㅈ다

a.~f.までの混記の例から、まず、日脱落現象は、すでに15世紀において始まっていることが知られる。d.とe.の例から、日系並書は硬音を表記していたことが知られる。さらに、ㅈㅈ > ㅈㅈの例から知られるように、語中で無声子音のあとに来る場合、音声的には硬音に近い音となることは明らかに認識していたと考えられるが、音韻としての硬音と考えられ始めていることが知られる。つまり、硬音化現象も、すでに、15世紀にはそのきざしをみせていると考えてよいと思われる。g.の例から、ㅈとㅉの差は、かなり少なく、混同されることが多いのではなかろうかと思われるが、事実、交替の例は少ない。この両方の文字は、同じ音を表記していたもので、ただ習慣的に書き分けられていたにすぎないと考えてよいと思う。文字が作られた動機も、ㅈ : ㅉ : ㅈ : ㅉの対比からの単に有気性の強弱による区別を付けるため、失なわれやすい特徴をもとにした文字であったと言えよう。

さらに、もう一つ考慮に入れるべきこととして、混記される語は、書き手の方言的差

異を反映している可能性があるという点である。このことについては、徐教授の詳細な議論がある。混記される語の数がそれほど多くないことが例から知られるが、方言との間によほど著しい音質の差がない限り、一度定められた表記法は、変化を受けないものである。これが、文字表記の大きな特徴である。

先に日系並書の日ヒは、音韻的には閉鎖音と考えられると述べたが、これに対し、許雄教授は、重子音である、つまり [p] として発音されていたとしている。なぜなら、現代においても、日音は、合成語に残っているからであるとして、힉삿, 입삿等を引用している。さらに、「和漢三才図会」の日に対する「ピサル」、朝鮮物語の「ヒサリ」の表記からも、そのことが知られると論じている。日本語音訳については、参考にするには問題があることを日系並書の議論の際にも述べたが、綴字に基いて表記したとも考えられる。ただ、日, 日における日音と日, 日における日音は、音韻的には、同一と分析せねばならないであろうが、音声的、調音的には、大きな差があったのではなかろうかと考えられる。つまり、閉鎖の強さ、内破の強さに相異があったと考えてよいと思う。中期においても、終声は、内破音となることが知られる。

(19)

뵈く뵈, 꺾く꺾, 뵈く뵈, 꺾く꺾

このことから、また、힉삿という例から、日系並書は、日内破音を伴う音であったと考えてよい。日内破音が上述のように、その強さにおいて、差があったと考える根拠は両唇音が朝鮮語の歴史のうえで、たどった変化をみれば、得られよう。歴史的な観点からみて、初頭に [p, f] をもって子音結合を作っていたものが、李朝前期には、それを失なうて、入で書かれたものがある。例としては、뵈など。日系文字における日音の差は、どれほどのものであったのかを知るための強力な証拠はない。ただ、音韻史からみると、日, 日における日ヒは、他のものより先に完全に脱落してしまうことより、最も弱いものであったと考えてよい。また、一歩進めて、すでに歴史的綴字の意味しか持っていないものも存在したかもしれない。

次に、日系並書は、のちに、日ヒを失い、代りに入で書かれる。なぜ日系並書で書かれることになったのであろうか。両唇音における、内破性の弱化、つまり、閉鎖性が弱まってくるのと同時に第2子音の硬音化が生じたためであろうと考えてよかろう。

4.0 結語

以上、みて来たように、日系並書は、朝鮮語の全濁音、つまり、硬音を表記するためのものである。現代のように、硬音を並書で表記するようになるのは、語中における新しい無意識的綴字のあらわれが、合理的と考えられるようになるにつれて、合用並書にとって代ってゆくのであろう。その背後には、語頭、語中に生じる音の同一性に関する認識があったと考えられる。